

民俗文化

第31号 近畿大学民俗学研究所

2019-10



民俗文化

第三十一号



① 住吉大社の太鼓橋
(大阪市住吉区、2019年9月、小野撮影)



② 鳥居の前
(2017年6月14日、小野撮影)



③ 修祓
(1999年、渡辺撮影)



④ 田舞を舞う神楽女 (八乙女)
(1969年、渡辺撮影)



⑤ 早苗を手にした植女
(1969年、渡辺撮影)



⑥ ⑤に同じ
(1999年、渡辺撮影)



⑦ 神田（「御田」）へ向かう植女
（1969年、渡辺撮影）



⑧ ⑦に同じ
（1999年、渡辺撮影）



⑨ 御神水
（1999年、渡辺撮影）



⑩ 武者
（1999年、渡辺撮影）



⑪ 供奴
（1999年、渡辺撮影）



⑫ 神田へ向かう武者
（1999年、渡辺撮影）



⑬ 神田への参進
(1999年、渡辺撮影)



⑭ 神田に入る齋牛
(2018年6月14日、小野撮影)



⑮ 神田を耕す牛
(1999年、渡辺撮影)



⑯ 田植え
(1999年、渡辺撮影)



⑰ 田舞
(1999年、渡辺撮影)



⑱ 田植え
(1999年、渡辺撮影)



⑱ 田植え
(2018年6月14日、小野撮影)



⑳ みとしめ 御稔女
(1999年、渡辺撮影)



㉑ みとしろまい 神田代舞
(1999年、渡辺撮影)



㉒ 棒打ち合戦
(1969年、渡辺撮影)



㉓ ㉒に同じ
(1999年、渡辺撮影)



㉔ ㉒に同じ
(2017年6月14日、小野撮影)



㉕ 住吉踊り
(1969年、渡辺撮影)



㉖ ㉕に同じ
(1999年、渡辺撮影)



㉗ ㉕に同じ
(2017年6月14日、小野撮影)

住吉大社の御田植神事

小野 雄祐

大阪市にある住吉大社では、毎年六月十四日に神社の境内にある御田にて御田植神事がおこなわれている。神事の日程は、現在では毎年同じであるが、かつては苗にとって良い日を卜っておこなわれていた。記録によれば、五月二十日頃から六月上旬までの日程が確認できる。大永八年以降は、五月二十八日に神事の日程が固定され、現在の日程へは明治の改暦に合わせて変更された。御田植神事の始まりは伝承によると、住吉神を現在地へ祀った神功皇后が長門国から植女を呼び寄せて、田植を始めたことだと伝えられている。住吉神は、海の神・禊祓の神・航海安全の神・漁業の神・農耕の神・和歌の神として信仰されており、御田植神事は農耕神としての住吉神への信仰が表れた神事である。

御田植神事は「粉黛・戴盃式」から始まる。この式は神事に先立って神社へ参った植女・稚児・御稔女が神事への参加資格を得るための祭儀で、午前より神館でおこなわれる。「粉黛・戴盃式」が終わると、午後一時から「本殿祭の儀」・「御田式場の儀」と神事が続いていく。

「本殿祭の儀」は神事へ参加者する神職・八乙女・植女・稚児をはじめ、替植女や風流武者などが参列する。初めに、境内にある石舞台で修祓がおこなわれ、続いて第一本宮で祭儀がおこなわれる。祭儀は修祓・献饌・祝詞奏上と進み、第一本宮の前に並んだ植女が神前から早苗を授与される。次いで、大田主が神前より御神水を受け取る。その後、祭礼参加者の代表による玉串拝礼と武者による風流武者行事がおこなわれる。「本殿祭の儀」が終了すると、御田講の講旗と講元を先頭に供奴・武者・楽人・神職・伶人・八乙女・稚児・御稔

女・植女・大田主・奉耕者・替植女と田植踊・住吉踊の人々が行列をつくり、御田へ向かう。本殿正面の鳥居を通って御田に到着した行列は、御田の周囲を一周し、「御田式場の儀」が始まる。

「御田式場の儀」は御田上中央付近に設営された舞台を中心に祭儀や神事芸能が、修祓・早苗授受・田舞・神田代舞・風流武者行事・棒打合戦・田植踊・住吉踊の順でおこなわれる。後半にある棒打合戦は御田の周囲で、田植踊と住吉踊は中央の舞台と御田の周囲でもおこなわれ、一般の人も目の前で見学することができる。

・修祓

祭儀や神事芸能に先立って、御田を祓い清める「修祓」がおこなわれる。まず、舞台から神職が四方の御田を祓い清め、次いで大田主が神前より受け取った御神水を舞台より四方の御田へ注ぎ入れる。舞台から御田が祓い清められ、「修祓」が終了する。

・早苗授受

舞台上で植女が神前から授かった早苗を替植女へと手渡し、田植が始まる。植女の役は堺の乳守の遊女が担っていたが、明治時代初期に断絶し、以降は大坂の新町の芸妓が中心となって神事を継承している。替植女は実際に田植えをおこなう女性で、白衣に赤い腰衣と襷に菅笠をかぶった服装で田植えをおこなう。田植えは女性だけでなく、男性の奉耕者も参加し、男性は白衣に傘をかぶり、黄色い襷をかけている。御田では赤い幕を背にかけられた齋牛による代掻

きもおこなわれている。

・田舞（八乙女舞）

田舞（八乙女舞）は住吉大社に伝わっている巫女舞（神楽舞）の一つで、住吉大社の神楽女によっておこなわれる。神楽女は白衣に緋の差貫で紅の襷を斜めにかけた姿で、菖蒲の造花を頭につけ、舞台の中央に設置された風流花傘を中心に舞う。風流花傘には草綿の造花がつけられており、長門国の国司から綿が奉納された故事に由来している。田舞には舞だけでなく、歌も伝承されており、歌には本歌と四季の歌の二種類がある。本歌には『枕草子』に登場する田植祭の歌詞と同じ文言が見られ、平安時代の歌が神事の中に保存されている。

・神田代舞

舞台上で御稔女による神田代舞が奉納される。神田代舞は御稔女が舞う雨乞い祈願の龍神の舞で、戦後につくられた御田植神事では最も新しい神事芸能である。御稔女は鶉色の小袖に紫暈かしの差貫で、神田代舞の途中に龍神の金の天冠をつける。

・風流武者行事と棒打合戦

舞台上で風流武者による風流武者行事がおこなわれ、次いで御田の周囲にて棒打合戦がおこなわれる。風流武者は黒漆の大高下駄を履き、日の丸の扇や薙刀を持った鎧兜姿で風流の所作をおこなう。薙刀や扇による風流の所作は、邪気払いの行為だとも考えられており、風流武者行事に続いておこなわれる棒打合戦は、紅白の二軍に分かれて、棒を打ち合う虫追いの呪術だと説明されている。風流武者は、かつて神宮寺の社僧がその役目を担っており、現在に継承されている高下駄・薙刀の装いは、明治維新以前の名残を残すものである。

・田植踊

風流武者行事・棒打合戦が終了すると田植えも終盤にさしかかり、田植踊が

おこなわれる。田植踊はかつて住吉周辺で田植え時に謡われていた田植歌に踊りをつけたもので、昭和初期に田植歌が失われた時に、神事に加えられた。田植踊では、舞台と御田の周囲で早乙女が踊り、御田中央に太鼓が設置され、田植歌が謡われる。早乙女の服装は白衣に紅い腰衣、赤い襷と赤い帯に菅笠と替植女に似た装いである。

・住吉踊

御田植神事の最後は住吉踊であり、伝承によれば神功皇后が堺の浜に上陸した時に、住民が踊った舞に由来すると伝えられている。中世には、神宮寺の社僧等が勧進のために諸国を巡って広めたと伝えられている。明治維新の時期に一時衰退するが、民間で伝承されていた住吉踊を大正十一年に復興し、現代へと継承されている。御田植神事での住吉踊は舞台上に拍子を取りながら謡う教導師と円陣を組んだ童女が立ち、御田の周囲でも童女たちが白衣に茜色の布をつけた菅笠、黒い腰衣・草履、団扇をもった姿で、飛び跳ねながら踊る。住吉踊は御田植神事だけでなく、住吉祭や観月祭などでも踊られており、住吉大社の祭礼で見ることが出来る。住吉踊が終わる頃には、田植えも終了する。

午後一時より始まった御田植神事の祭儀は午後四時までには終了する。住吉の御田で育てられた米は十月十七日の宝之市神事でお祓いの後に収穫され、前に奉納される。収穫された米の一部は宮中にも納められ、新嘗祭で用いられる。

御田での神事芸能には、平安時代に見える田植歌や住吉大社に伝承されてきた巫女舞をはじめ、住吉踊や風流武者、田植歌など様々な時代の姿が神事の中に保存されている。昭和五十四年には国の重要無形民俗文化財に指定されており、住吉大社の御田植神事は古式を残した神事の一つである。

(注)

(1) 『住吉大社松葉大記』(大阪市史編纂所編 二〇〇二年 『大阪市史料第五十八輯』 大阪市史料調査会)

(2) 『枕草子』(萩谷朴校注 二〇一七年 『新潮日本古典集成〈新装版〉 枕草子下』 新潮社)

(参考文献)

住吉大社編 二〇〇二年 『住吉大社〈改訂新版〉』 学生社

真弓常忠 二〇〇三年 『住吉信仰』 朱鷺書房

本田安次 二〇〇九年 『御田植神事』 真弓常忠編 『住吉大社事典』 国書刊

行会

これらの参考文献以外にも住吉大社で配られていた『重要無形民俗文化財指定住吉の御田 ―住吉大社「御田植神事」略記―』と『重要無形民俗文化財指定住吉大社御田植神事 ―諸役と芸能について―』を参考にした。



図 22 赤い二匹鯛 桜井市芝の民家

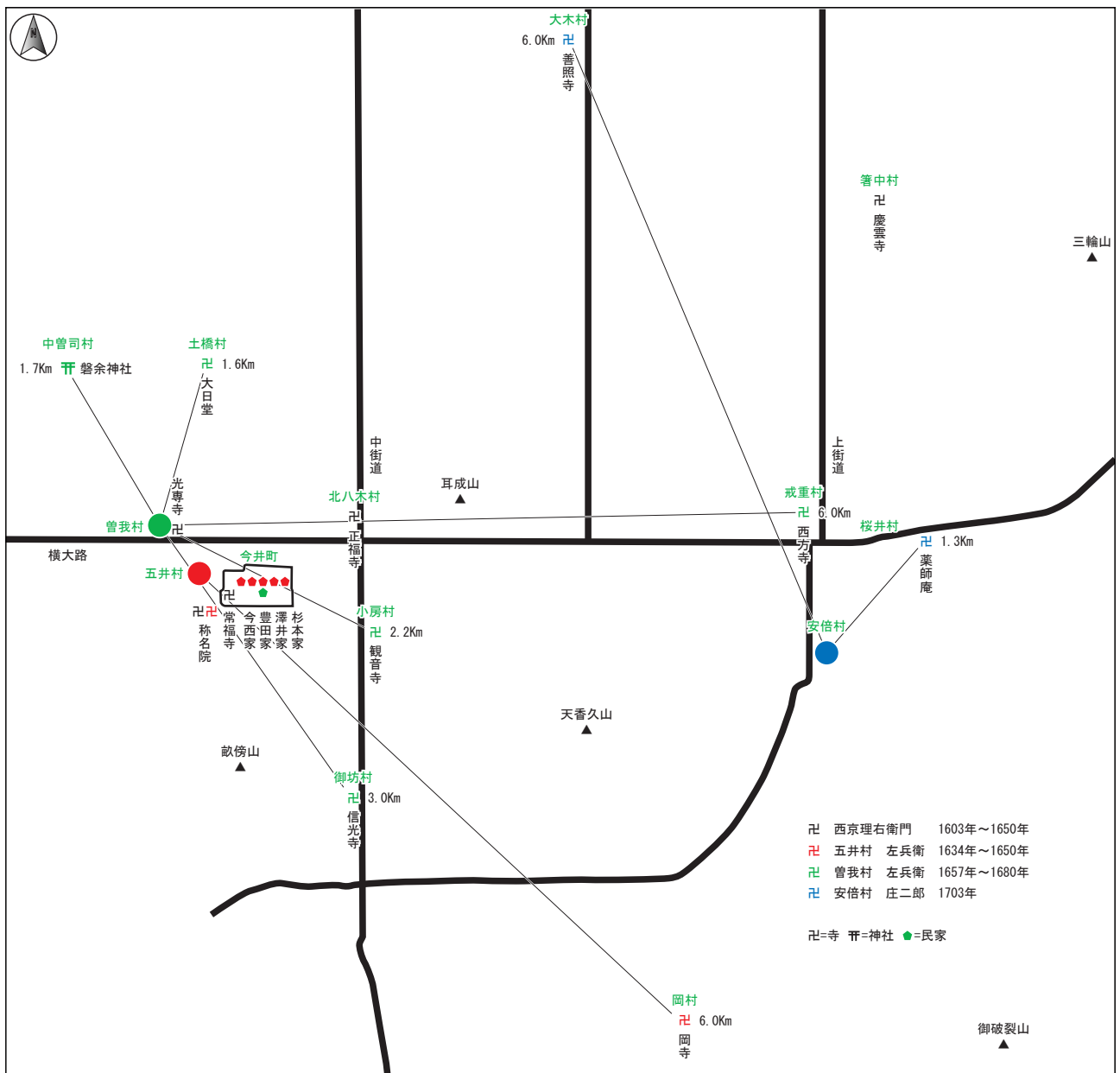


図 62 初期の瓦屋の成立

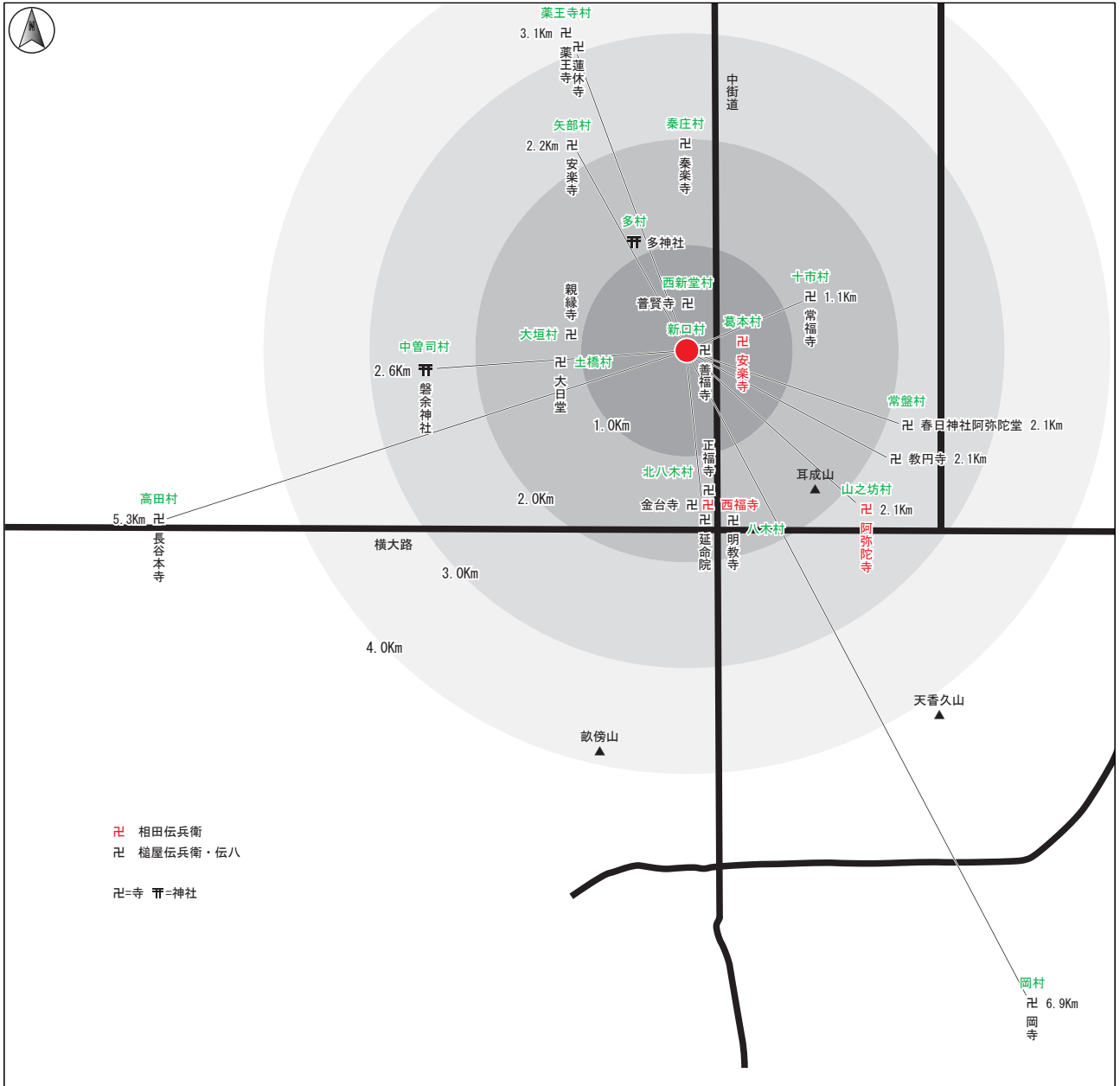


図 65 相田伝兵衛と槌屋伝兵衛・伝八の縄張

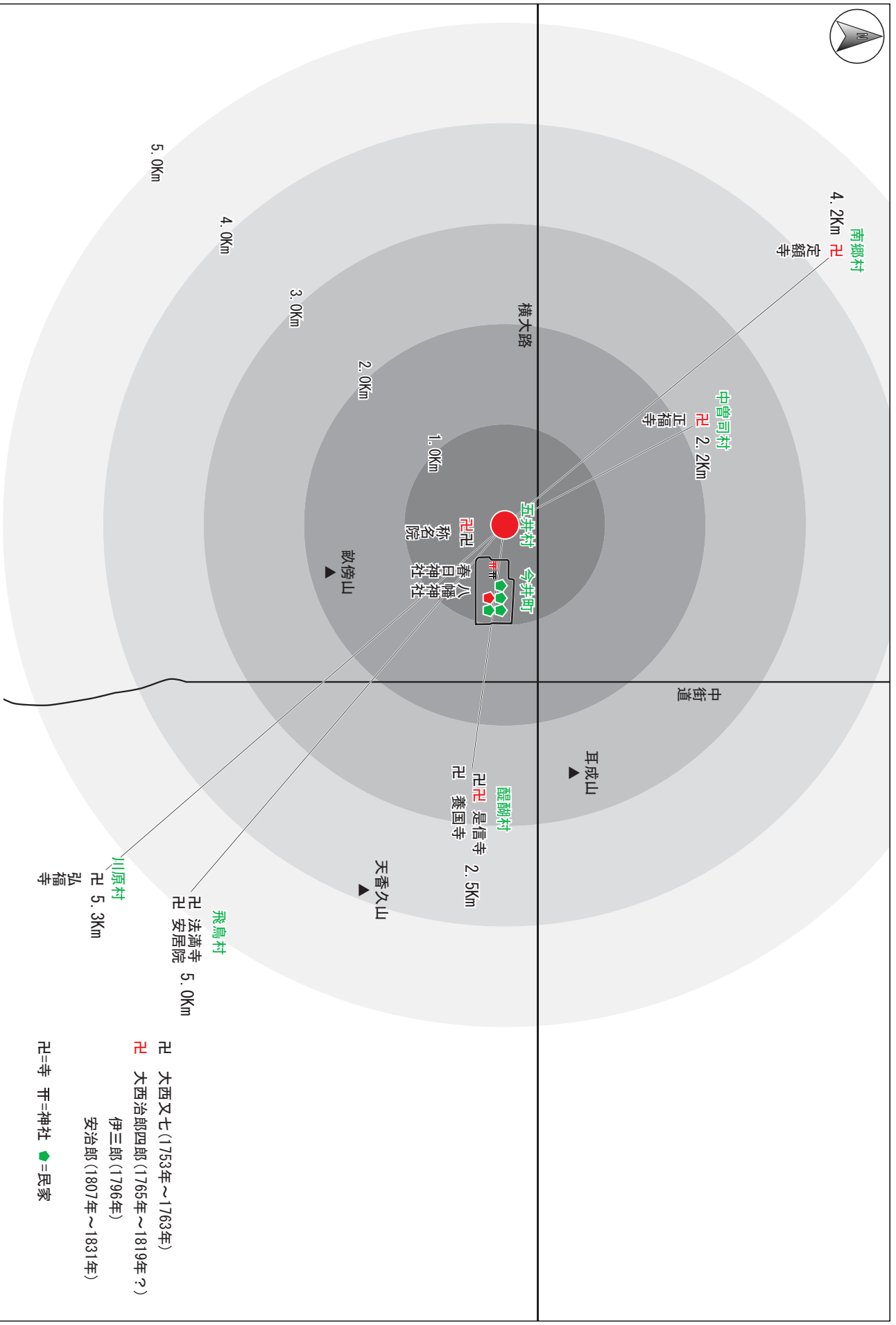


図 67 大西又七・治郎四郎の縄張

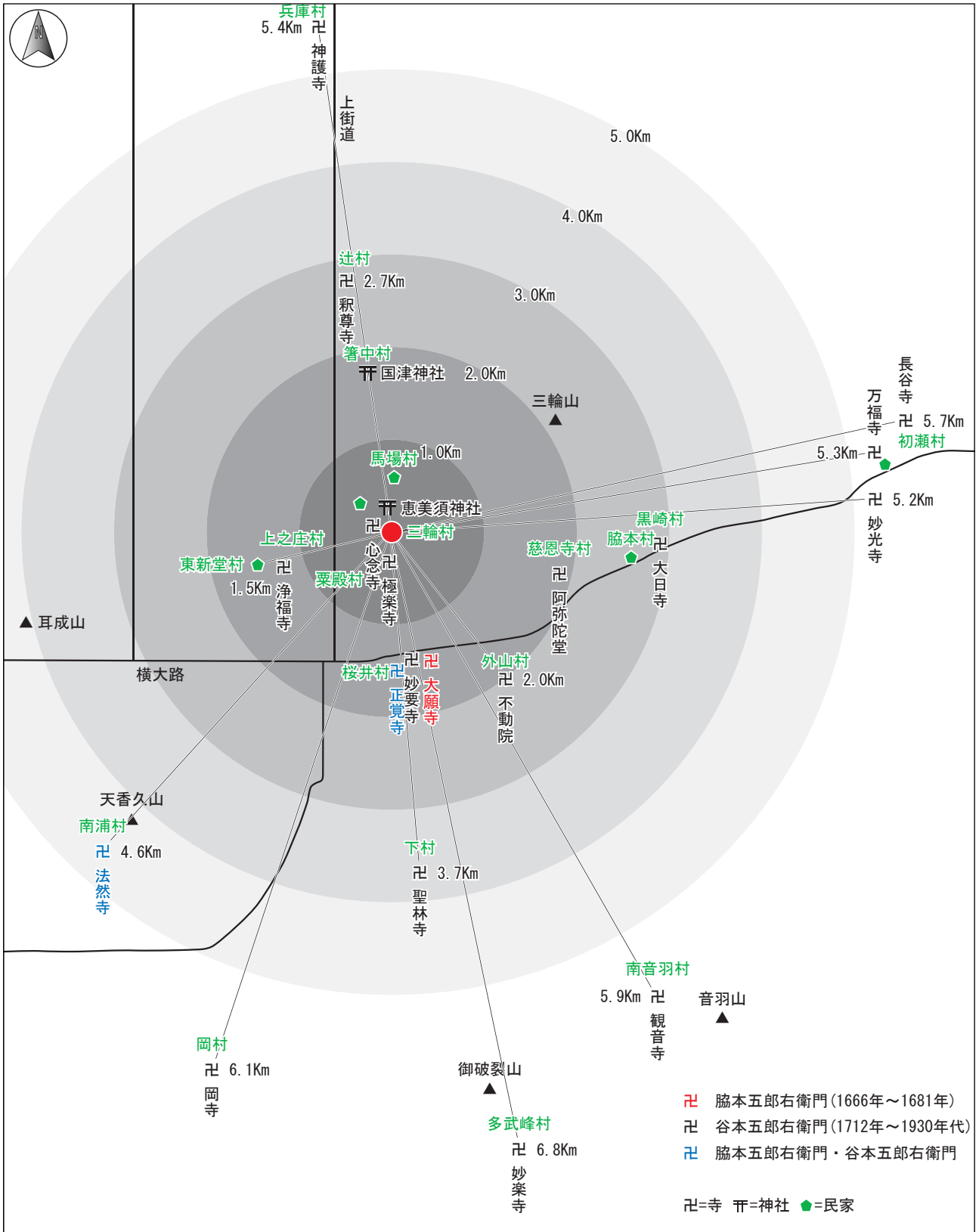


図 68 脇本五郎右衛門と谷本五郎右衛門の縄張

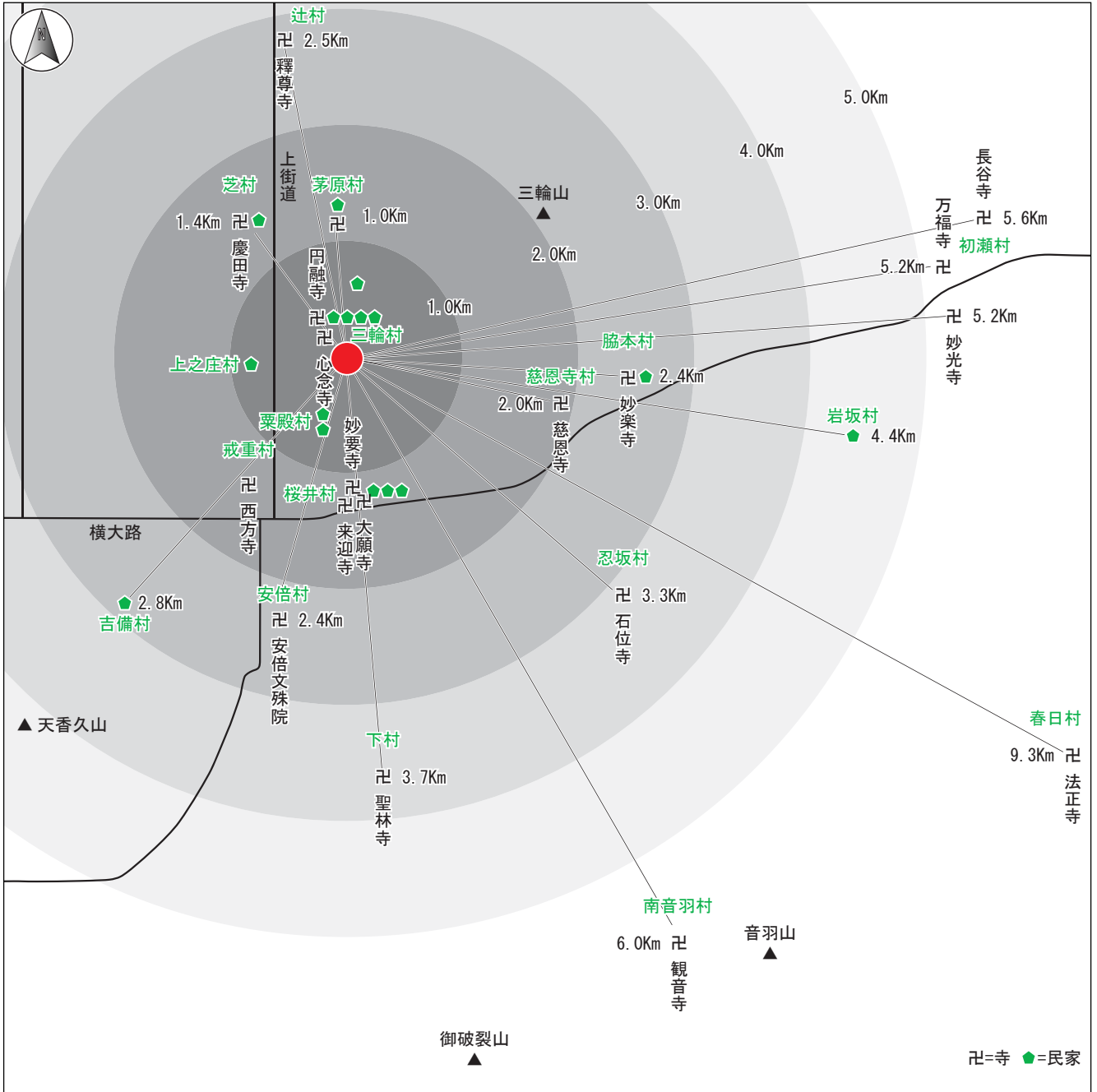


图 70 三輪村佐平次の繩張

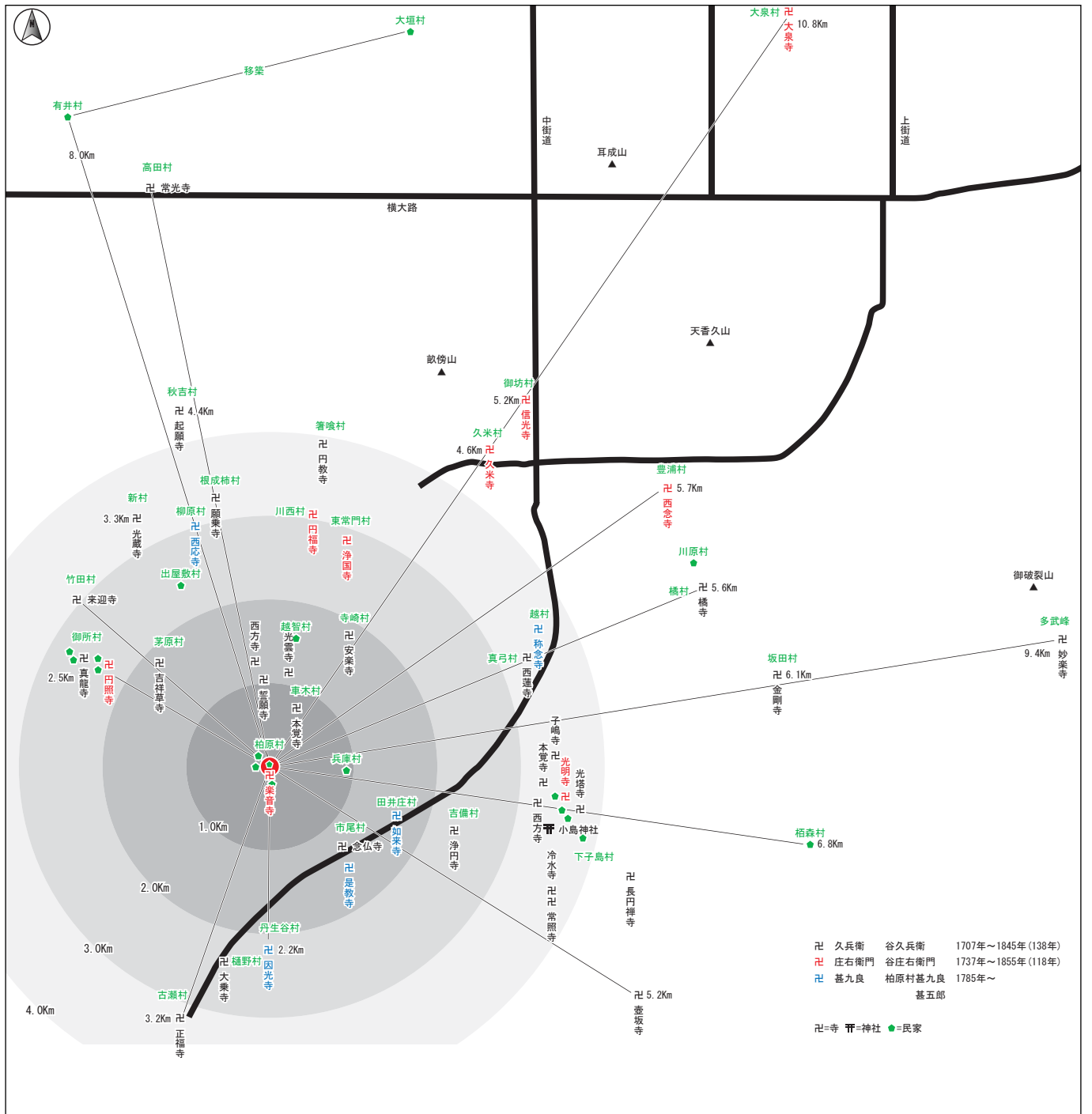


図 80 柏原村の瓦屋の縄張

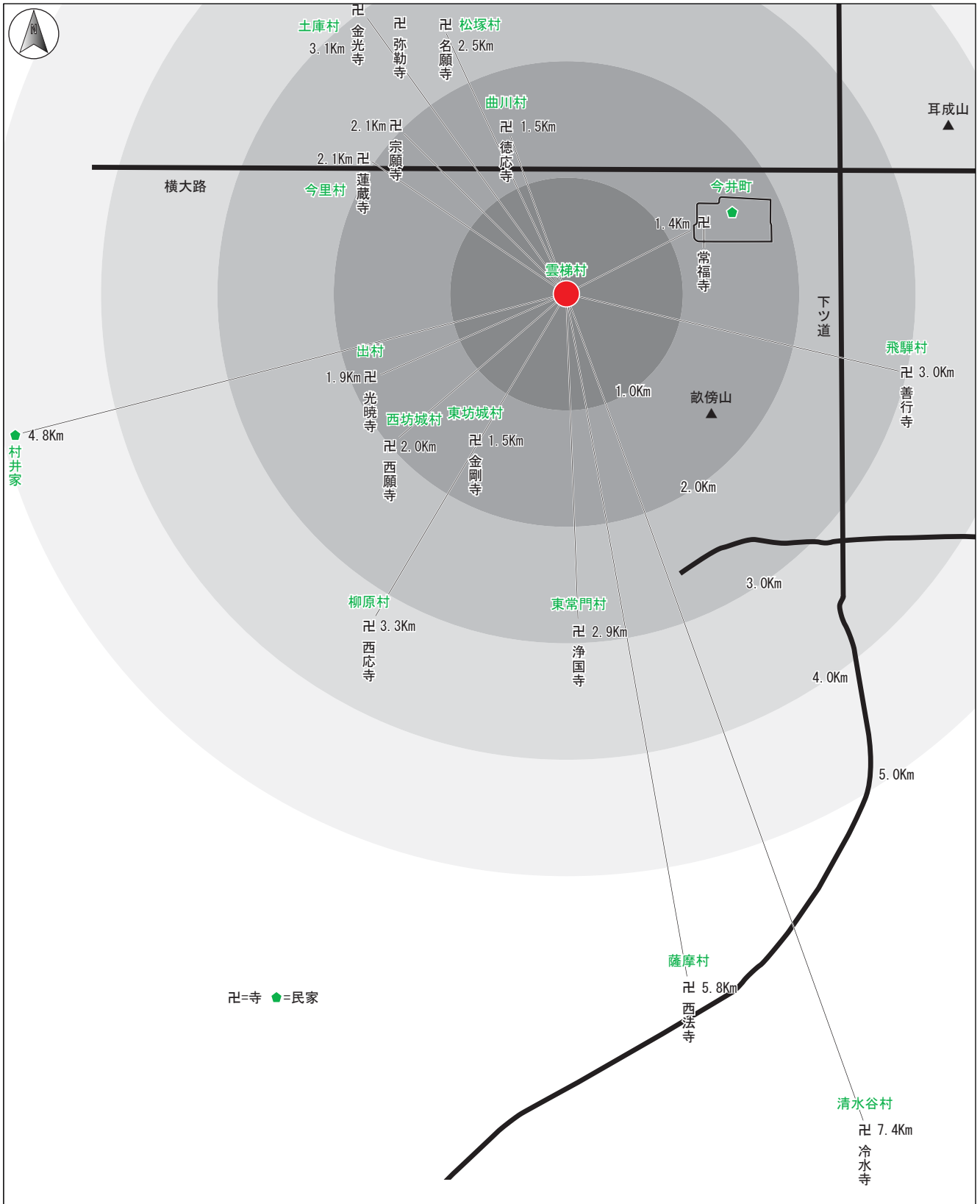


図 81 雲梯村小兵衛の縄張

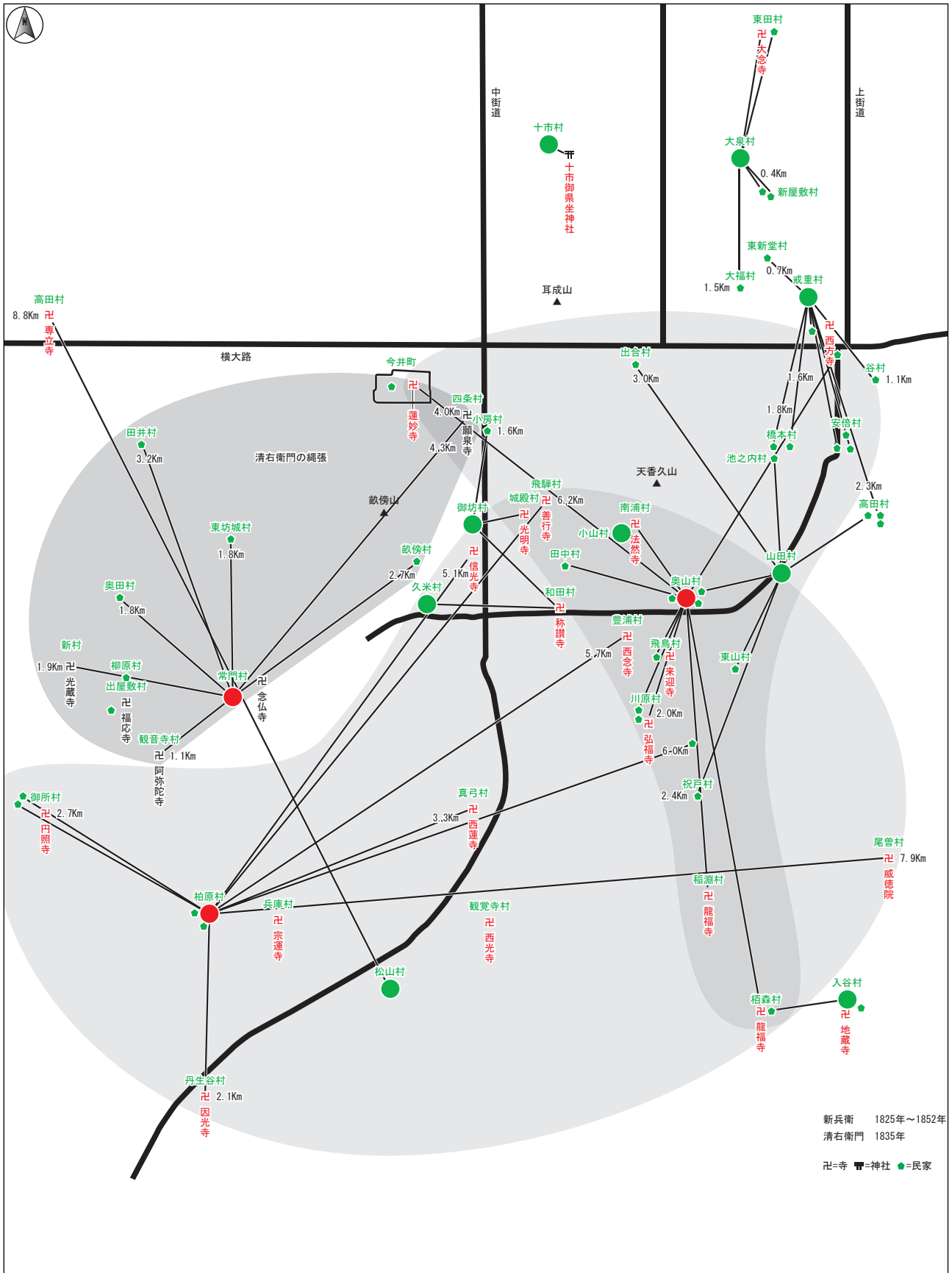


図 93 常門村新兵衛と清右衛門の住み分け

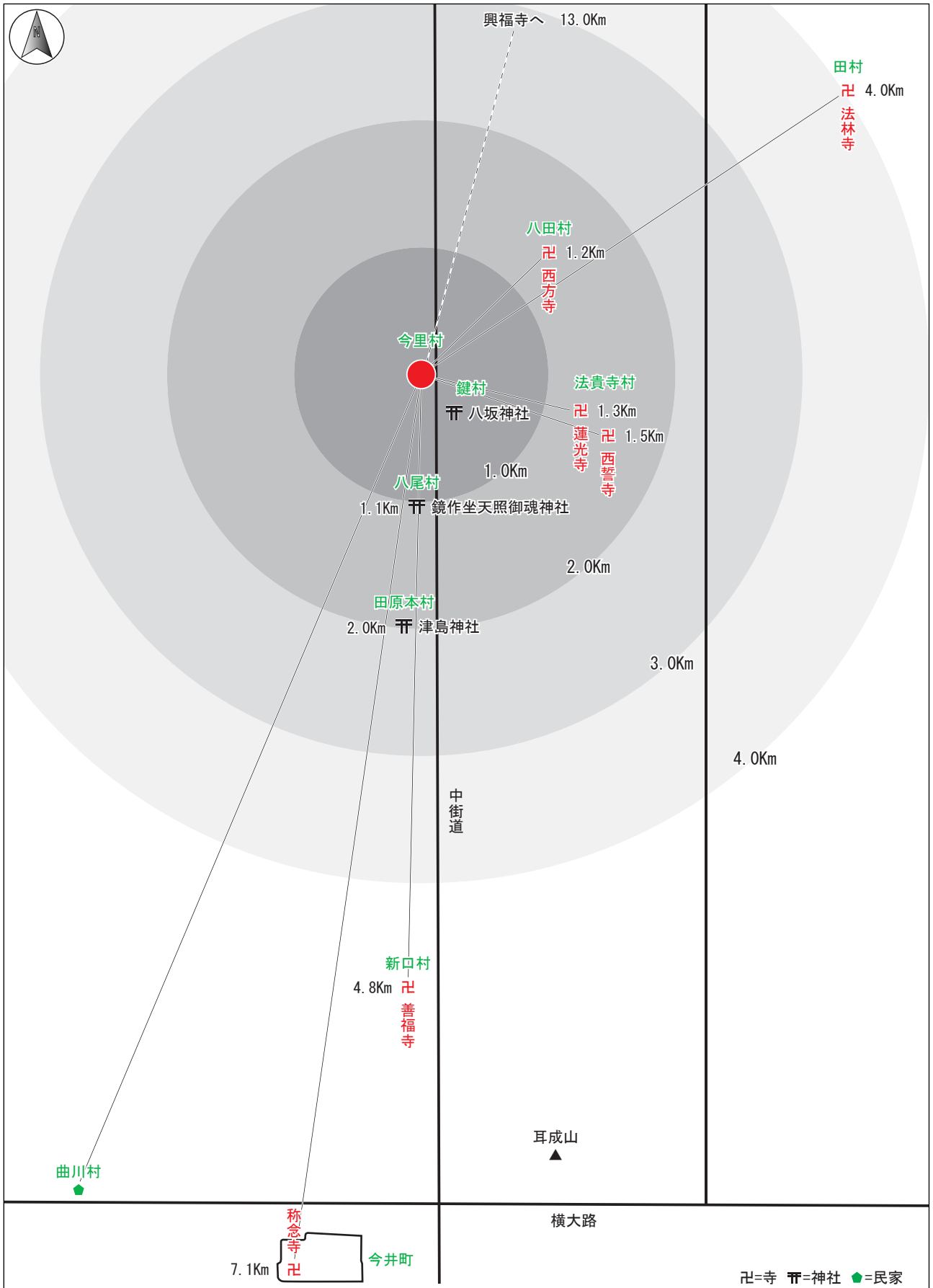


図 98 今里村木村清八・清五郎・平七の縄張

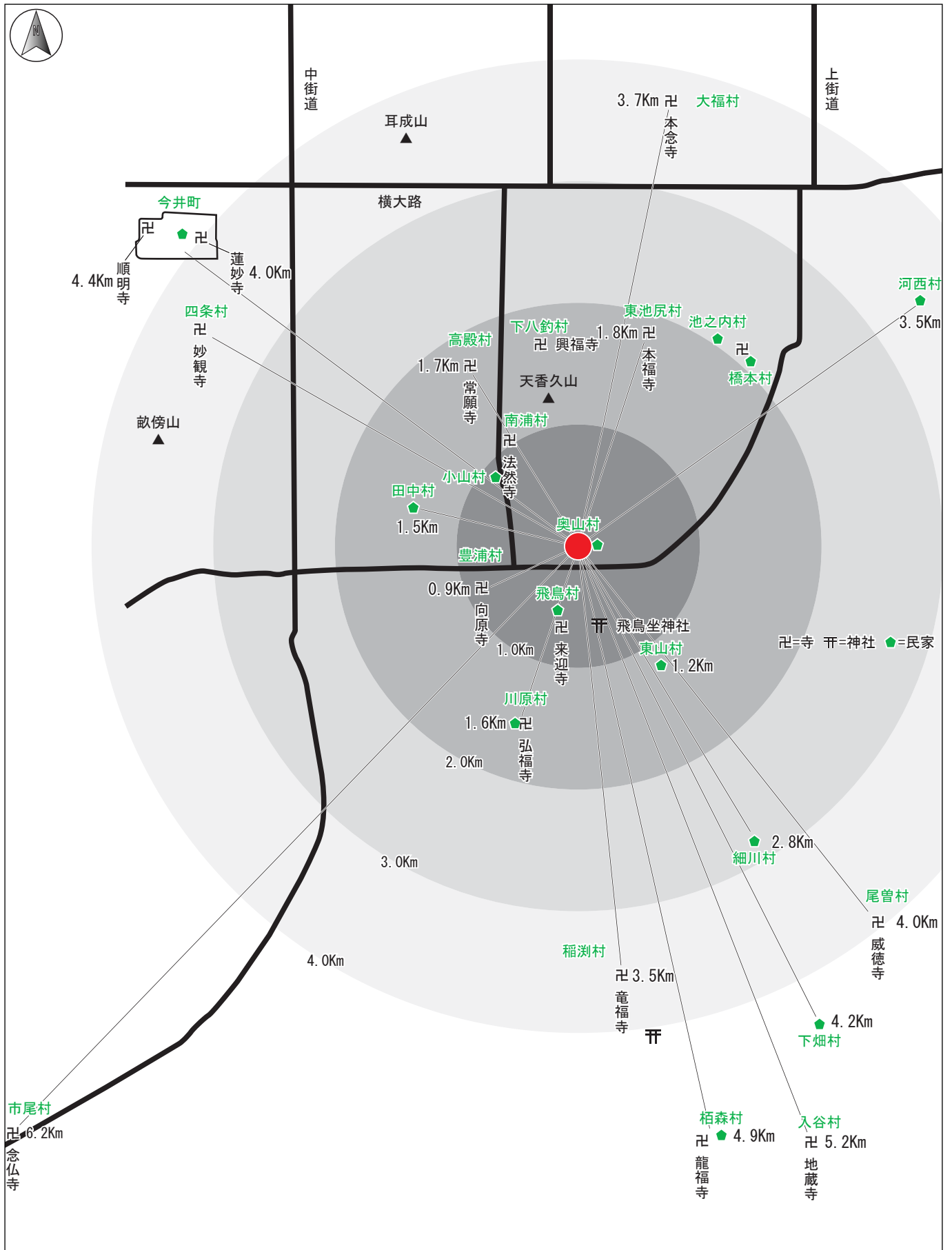


図 101 奥山村上田嘉右衛門・嘉重良・治兵衛の縄張

表紙・口絵写真 住吉大社の御田植神事

渡辺良正(写真)
小野雄祐(写真・解説)

目次

近畿の民俗・文化

和歌山県高野町の盆棚	藤井弘章	1
やまと・まほろば・豊紀行	大脇潔	77
―鬼瓦の銘文からたどる近世瓦屋の成立・展開から終焉まで―第一部		
ラジオ塔についての覚書	人見佐知子	183
和歌山県における櫛の民俗	藤井弘章	229
―紀美野町の栽培・採取を中心に―		
抹消天然記念物「葡萄櫛の原木」調査報告	三木明音・横田沙羽子・中村巴菜 鞍雄介・藤井弘章	255
日本庭園の萌芽をみる	網伸也	267
―考古学からみた飛鳥・奈良時代庭園の変遷―		
越前国一乗谷周辺での山林用益		
―中世城郭廃絶後の土地利用をめぐって―	新谷和之	285

書評と紹介

菊池勇夫著『飢えと食の日本史』	胡桃沢 勘 司	301
筒江薫編『民俗学者・野本寛一 まなびの旅』	辻 貴 志	305

付録

民俗学研究所第三〇回公開講演会・文芸学部設立三〇周年記念事業講演会	野 本 寛 一	309
近畿大学と民俗学（講演要旨）		

執筆者紹介		
-------	-------	--	--

投稿規定		
------	-------	--	--

編集後記		
------	-------	--	--

近畿の民俗・文化

執筆者紹介（五十音順）

網伸也（あみ のぶや）

一九六三年、大阪府生まれ。近畿大学文芸学部教授、同民俗学研究所所長。『平安京造営と古代律令国家』（塙書房、二〇一一年）、『経塚考古学論攷』（共著、岩田書院、二〇一二年）、『仁明朝史の研究―承和転換期とその周辺―』（共著、思文閣出版、二〇一二年）、『シリーズ古代史をひらく 古代の都』（共著、岩波書店、二〇一九年）、『古代寺院史の研究』（共著、思文閣書店、二〇一九年）、など。

大脇潔（おおわき きよし）

一九四七年、名古屋市生まれ。フリーランスアルケオロジスト、元近畿大学文芸学部教授、民俗学研究所第三代所長。「みちのく蕨紀行―宮城・福島県の被災地を歩いて―」（『民俗文化』二五、二〇一三年）、「七世紀の瓦生産―花組・星組から荒坂組まで―」（『古代』一四一、早稲田大学考古学会、二〇一八年）、「堂内荘殿の考古学―緑釉波紋埴と埴仏から―」（『古代寺院史の研究』共著、思文閣出版、二〇一九年）、など。

小野雄祐（おの ゆうすけ）

一九九三年、大阪市生まれ。近畿大学大学院総合文化研究科修了生。八洲学園高等学校非常勤講師。

鞍雄介（くら ゆうすけ）

一九八一年、大阪府生まれ。りら創造芸術高等学校教頭。『真国川流域の納豆文化』（高野文化圏研究会、二〇一四）『和歌山に納豆が！？―地域を耕し生徒が育つ―』（紀陽銀行、二〇一八年）、『元天然記念物葡萄櫛の原木発見記』（和歌山県立図書館、二〇一八年）、など。

胡桃沢勘司（くるみさわ かんじ）

一九五一年、長野県生まれ。近畿大学名誉教授、民俗学研究所第四代所長。『西日本庶民交易史の研究』（文献出版、二〇〇〇年）、『牛方・ボッカと海産物移入』（岩田書院、二〇〇八年）、『近世海運民俗史研究―逆流海上の道―』（芙蓉書房出版、二〇一二年）、『押送船―江戸時代の小型快速船』（岩田書院、二〇一八年）、など。

新谷和之（しんや かずゆき）

一九八五年、和歌山県生まれ。近畿大学文芸学部特任講師、同民俗学研究所員。『戦国期六角氏権力と地域社会』（思文閣出版、二〇一八年）、『戦国時代の大名と国衆』（共著、戎光祥出版、二〇一八年）、『近江六角氏』（編著、戎光祥出版、二〇一五年）、「成立期和歌山城の政治的意義―豊臣政権の「統一」事業との関わりから―」（『研究紀要』二八、和歌山市立博物館、二〇一三年）、など。

辻貴志(つじ たかし)

一九七三年、大阪府生まれ。近畿大学経営学部非常勤講師、佐賀大学大学院農学研究科特定研究員。「スイギュウ乳を用いた *pastilles* の加工—フィリピンのブラカン州サンミゲル町の事例—」『佐賀大学農学部彙報』一〇四(二〇一九年)、「民族と民俗の博物館」小林秀司・星野卓二・徳澤啓一編『新博物館園論』(同成社、二〇一九年)、『An Eco-Material Cultural Study on Bird Traps among the Palawan of the Philippines. *Naturra Widya* 一三(一)(二〇一九年)』など。

中村巴菜(なかむら はな)

りら創造芸術高等学校三年生(二期生)、地域デザイン専攻。

野本寛一(ののもと かんいち)

一九三七年、静岡県生まれ。文化功労者、近畿大学名誉教授、民俗学研究所第二代所長。『生態民俗学序説』(白水社、一九八七年)、『季節の民俗誌』(玉川大学出版部、二〇一六年)、『民俗のことばで探る 遠山谷の環境と暮らし』(柳田國男記念伊那民俗研究所、二〇一八年)、『近代の記憶 民俗の変容と消滅』(七月社、二〇一九年)、『生きもの民俗誌』(昭和堂、二〇一九年)、など。

人見佐知子(ひとみ さちこ)

兵庫県生まれ。近畿大学文芸学部教員、同民俗学研究所所員。『近代公娼制度の社会的研究』(日本経済評論社、二〇一五年)、『第4次現代歴史学の成果と課題3 歴史実践の現在』(共著、績文堂出版、二〇一七年)、「戦争の子ども」からオーラル・ヒストリーを考える」(『日本オーラル・ヒストリー研究』

一四、二〇一八年)など。

藤井弘章(ふじい ひろあき)

一九六九年、和歌山市生まれ。近畿大学文芸学部教授、同民俗学研究所所員。『高野町史 民俗編』(共著、高野町、二〇一二年)、「高野山納骨習俗の地域差—和歌山県北部を中心に—」(『民俗文化』二九、二〇一七年)、『日本の食文化 4 魚と肉』(編著、吉川弘文館、二〇一九年)、『三和インセクティサイド 50年のあゆみ』(編著、三和インセクティサイド、二〇一九年)、など。

三木明音(みき あかね)

りら創造芸術高等学校三年生(二期生)、地域デザイン専攻。

横田沙羽子(よこた さわこ)

りら創造芸術高等学校三年生(二期生)、地域デザイン専攻。

渡辺良正(わたなべ よしまさ)

一九三三年、福岡県生まれ。民俗写真家。『沖縄先島の世界』(木耳社、一九七二年)、『日本の祭り 山車と屋台』(サンケイ新聞社、一九八〇年)、『椎葉神楽』(平河出版社、一九九六年)、など。

民俗文化 投稿規程 (令和元年七月)

- 一、投稿できる者は、近畿大学民俗学研究所々員および同所員より推薦を受けた者とする。
- 二、受け付けた原稿は複数の査読者による査読を受ける。その結果にもとづき、掲載の可否を決定する。論部の内容に不備がある場合には、編集委員から投稿者に修正を求める。
- 三、刷り上がりは、A四判・縦書き(必要な場合は横書きも可)、一ページあたり三十五字×十九行×二段を原則とする。原稿執筆にあたっては、できる限り、刷り上がりに合わせて字数設定を行うものとする。
- 四、投稿の締切日は、毎年五月末日とする。原稿は、原則として、電子記憶媒体(CD等)を添えて編集委員に提出する。
- 五、別刷は五十部を無料とする。
- 六、刊行後の報文(論文、研究ノート、書評、写真及び写真解説等)は、その著作権が近畿大学民俗学研究所に帰属する。ただし、著作者本人による転載等をさまたげるものではない。
- 七、刊行後の報文(論文、研究ノート、書評、写真及び写真解説等)は、冊子体以外の媒体(近畿大学学術情報リポジトリ等)で公開されることを承諾のうえ投稿すること。ただし、電子媒体での公開に際しては、著作者本人もしくは話者の意向等により、一部または全部を非公開とすることがある。

近畿大学民俗学研究所

編集後記

『民俗文化』は本号で31号を迎える。節目の年に当たり、『民俗文化』の判型を変更することにした。最も大きな理由は、図版を掲載しやすくするためである。これにより所員や元所員の成果をよりわかりやすく紹介することが可能になった。これまで、1年単位で特定の調査地域を決め、所員が各自のテーマで調査をおこない、翌年の『民俗文化』に調査成果をまとめるという方針を取ってきた。日本列島各地を訪ね歩き、広域の民俗調査をしていくことは、近畿大学民俗学研究所の大きな特色となっている。一方で、大学が所在する近畿地方を中心に、所員の研究成果が蓄積されてきている。また、文芸学部文化・歴史学科で実施している民俗学実習、文化探索実習、文化活用・発信実習などの授業において、調査地域と連携しながら学生とともにこなっている活動で蓄積してきたデータも多い。こうした成果を紹介していくことも近畿大学民俗学研究所の重要な使命であると思われる。本号は、このような成果を紹介する場とし、近畿の民俗・文化という特集を組んだ。ただし、これまでの全国規模の調査を中止するのではなく、所員各自の調査は継続し、また、何年かに一度の割合で、近畿以外の特集号を組むことも検討している。今後も試行錯誤しながら、先生の先生方が築き上げてきた研究所を受け継ぎ、近畿大学らしい『民俗文化』を発行しつづけていきたいと思っている。

(H・F)

民 俗 文 化 第 31 号

令和元年 10 月 31 日印刷
令和元年 10 月 31 日発行

編集・発行者 近畿大学民俗学研究所

〒577-8502
東大阪市小若江3丁目4番1号
電 話 (06) 6721-2332

印 刷 所 近畿大学 管理部 用度課



近畿大学

KINDAI UNIVERSITY